

わたしのもとに来る者は

新しい主の年 2022 年を迎えました。今年も新年最初の礼拝はローズンゲン＝「日々の聖句」の年間聖句の御言葉に聴いてまいります。ドイツのヘルンフト兄弟団が発行しているこのローズンゲンは今年で 292 版を数えます。くじで旧約から一句を選び、それに対応する新約聖書の箇所を選ぶやりかたで、その一日の御言葉が決まります。人間の選択を排除して、くじによって、神さまの意志が現されるのに任せる。おみくじですね。イスラエルはカナンに入る直前にくじを作り、それを引いてそれぞれがどの土地を得るかを決めたことが民数記に記されています。これなどもくじに神の御心が現されると考えていたのです。ローズンゲンは使ってみると分かりますが、これが本当に的確にわたしたちの日常を撃つことがあり、驚かされます。わたし自身がそれをもっとも強く示されたのは東日本大震災の起きた 2011 年 3 月 13 日受難節第一主日のローズンゲンでした。金曜日に大震災が起き、土曜日は福島第一原子力発電所のメルトダウンが明らかになり、日曜が 13 日、何を語ったら良いかと呆然として開いたローズンゲンが「お前たちの周囲に残された国々も、主であるわたしがこの破壊された所を建て直し、荒れ果てていたところに植物を植えたことを知るようになる」というエゼキエル書 36 章 36 節の御言葉でした。しばらく絶句して穴があくほどローズンゲンを眺めていたことを思い出します。主の御言葉による備えを教えられ、講壇に立つことが出来ました。一般的な使い方としては、その日の御言葉を朝読み、ポケットにいれておいて、昼食の休憩のときに読み、折に触れて読んで、わたしたちの経験を神がその日に与えて下さった御言葉に触れさせる。御言葉を支えとして、杖として、一

日を歩むのです。そのローズンゲンが年間聖句として定めたのがヨハネによる福音書6章37節の御言葉です。この御言葉を通して一年を展望するのです。キリスト者であるわたしたちの生きるリズムは、毎週の礼拝で、神の御言葉に出会い、思いを吟味され、生き方の向きを修正して歩むことの繰り返りで形づくられます。

この2年、わたしたちは世界史的な事態となった新型コロナウイルス感染症問題で日常や、ルーティンをふっ飛ばされてしまいました。計画をたてても、その通りに出来ないことが増えました。人間は全能ではないことを痛切に知らされる機会とされています。非常時対応も2年目にはいり、非常時対応なりの仕組みが出来上がって来ています。半田教会では礼拝を二部制にして三密をふせぐシフトに切り替えましたが、礼拝そのものをお休みにすることは避けました。掛け替えのない出来事の起こされる場が礼拝と考えるからです。御言葉を頂き、それによって人格を形作ること、それは神の言葉に責任を持ってお答えしてゆく。応答してゆく姿勢。お言葉通りこの身になりますように、と御言葉に身を沿わせてゆく者のうえに神のご計画、神の召しを実現してゆきます。その歩みが神に支えられて歩むわたしたちの人生となり、その人生の分かち合いが、今度は教会という主に召し集められた群れを養うものとなります。こうして御言葉によって人格と人生と共同体を形作る、わたしたちの教会の歩みが118年間、主の見守りと備えのもとで続けられてきたのです。そして今朝も、わたしたちはローズンゲンの年間聖句に聴き、御心を知って歩みを整えようとしています。

イエス・キリストは言われます。「わたしは、わたしのもとに来る者を決して追い出さない」。これは人々がイエス様のところに来て、それでは、主よ、そのパンをいつもわたしたちに

ください、と言った流れからの一句です。これは非常にながく、重要な単元で、イエス様が5千人にパン5つと魚二匹をわかちあう奇跡をなさったあとのこと。食べて満腹した人たちが、イエスのもとに殺到します。このパンの奇跡は4つの福音書すべてが記している唯一の奇跡で、イエス様がなさった出来事の中でもっとも有名であり、この方がどういう方であることを示すイエス様の本質に迫るものだと福音書記者たちが考えていたものです。とくにヨハネはここからイエス様の「わたしは命のパンである」という重要な証言を記しています。ここで問題にされているのは肉体を養う日々のパン、わたしたちが生きるために必要とする日々の糧に意味を与える存在、すなわちキリスト・イエスこそがまことの食物であるということです。パンの問題は、今回のコロナの事態でも、三密を避け、不要不急の外出は避けよと言いながら経済は回さないわけにはゆかないわたしたちの現実とも地続きの問題です。そしてそれは究極的には、命を養うものは何かという問いにつながるものです。これはキリストを信じればメシが食えますか、と言い換えることもできます。篠田先生がお書きになった「泉のほとり」でもこの問題はまっさきに取り上げられていましたね。荒野の誘惑でもまっさきに悪魔に問われ、「人はパンのみにて生きるにあらず、神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」と切り返されたことです。つまり、わたしたちの衣食住の確保、安全にかかわる問いかけであり、わたしたちが必要とし、求めてやまないもの、それが保証されていれば支障なく、わたしたちが生きて行けると思い込んでしまうものです。そしてそれを可能にする万能財がお金ということになりますから、命の問題はお金の問題だとなってしまうわけですね。これは応用問題です。お金や、食べ物という、わたしたちの日常に直結した問題で、神様のこ

とを思う。神さまとの関わりで日毎の糧を考える。生きているのではなく、生かされている。持っているのではなく、与えられている。自分と切り離れたところで考えるのではなく、神さまを身近に捉えて生きることで生きる意味と目的を過（あやま）たない。パンやメシは生きるための手段であって目的ではありません。パン自体が、わたしの生きる意味を教えてくれるわけではありません。命を与えられたわたしがどのようにして生きて、与えられた人生の意味内容を豊かにしていくか、という生きる意味や目的を、物質であるパンが教えてくれることはありません。この意味で、いつのまにかパンの獲得が目的となってしまうとしたら大問題です。イエス様はそここのところを見逃しません。命にかかわる問題だからです。身体の維持だけではない。心も魂も含めたトータルなわたしの存在の健やかさにかかわる問題なのです。わたしはアウグスティヌスの祈りが好きで、この祈りを唱えることがよくあります。「神よ、あなたはわたしたちをあなたご自身に向けてお作りになりました。ですから、わたしはあなたご自身のなかに憩うことなしには安らぎを得ません」、この祈りですね。そしてこれは今日の聖書箇所です。主イエスが言われたことともつながっています。「わたしは、わたしのもとに来る者を決して追い出さない」、ヨハネによる福音書の、この出来事を記す流れでとらえますと、人々が求めているパンと、イエス様が差し出そうとしているパン、これはご自身のことですが、そこには食い違いがあります。そしてそれはヨハネでは神の選びの問題とリンクされています。「あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。父がわたしにお与えになる人々は皆、わたしのところに来る。」神がお招きになったひとがわたしのもとに来る、礼拝に招かれるということです。この招きを捉えることはとても大切です。この箇所はいえ

ば、キリストによって5千人に食べ物を与える出来事が起こされた。その出来事にイエス様は神さまとの関わりで「わたしが命のパンである」と起きた出来事とそれを起こされたご自身の間に言葉で橋をかけ、招きの言葉を人々に贈られたのです。それを人々はどのレベルで受け止めるか、応答するのか。肉体が養われた、今日の食物が与えられた。便利だ、この人についていけば食い逸れることはない。王にしようとして連れて行こうとしたとヨハネは記しています。しかし、そういうことではない。ここにはわたしたちの問題性が明らかにされています。それは、わたしたちは神さまに自分の求める求め方でしか近づかないということです。自分の欲しいものだけを求めて近づく。だからイエス様は人々の前から退かれたのです。距離を取られた。それでもなお自分の求め方で近づく人々に向けて、ご自身がまことの命を養われるパンであることを明らかにされました。小麦で焼いたパンがわたしたちの生きる意味と目的を満たすのではないのです。困難や、悲しみや、生きる悩みのなかで日々すり減ってゆくわたしたちの心と魂を守るのは神の言葉であり、わたしたちの永遠の同伴者であるキリスト・イエスなのです。この方がともに居てくださり、わたしを拒まれることはないという確信が、わたしを支えるのです。「死の陰の谷を歩むともわたしは災いを恐れません。あなたがともに居て下さるからです」と感謝の告白をすることが許されるのです。ヨハネは、御言葉が人となられた方として、イエス様を描きました。この方が、命のパンである、つまり、わたしたちの心と身体と魂からなる命全体をトータルに支え、守られる方なのです。この信仰が、わたしたちに日々必要であり、またそれをともに聴いて応答する礼拝の 때가、神の民としてのわたしたちを養います。悲しみや苦しみの中にあっても人生のなかで生きる意味を、

立ち上がる力を実らせてゆく信仰を培うのです。そして、わたしの信仰は、わたしたちの信仰の中で、讃美の中で、祈りの中でしか育たないことをわたしたちは知っています。礼拝を守り続けてきた信仰の先達によって育てられて、わたしたちはこの場に集っています。7日ごとに、わたしたちに与えられる礼拝のときが、滑りやすい日常のなかで、わたしたちをつなぎとめていきます。主イエスは、わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがないと約束してくださいました。命のパンとして来られた方の招きの言葉を、わたしたちは、新しく与えられたこの年もともに分かち合い、賛美しながら、ともに主に召し集められた群れとして歩みたく願っています。

お祈りいたします。